

# 不二

一般版

2/2023



令和四年度第3回昇格・昇段試験成績発表  
第66回「不二」一般版会友試験合格発表  
第72回 書道學會展成績発表

公益財団法人 日本書道教育学会



# 今月の競書課題

専門部 会友 準六段

今月の出品期間 2月6日(月)～2月15日(水)必着

## 漢字半紙

左の語句を、半紙を縦使用、自運縦書き。(書体自由)

福生於清約

福生於清約

〔読み〕福は清約に生ず

〔大意〕幸福は清く慎ましい行いから生まれるのだ。

〔出典〕「鳴鶴作品草稿集Ⅰ」より樊密庵(明)の句

## かな半紙

左の短歌を、半紙を縦使用、自運縦書き。

(変体がなの使用、漢字・かなの書き換え自由)

折りつれば袖こそにはへ梅の花ありとやここに鶯の鳴く

〔大意〕梅の花を折ったので私の袖は匂っているのだが、花があるわけではない。

けれども梅の花がここにあるのかと思つて鶯が鳴きにくるよ。

〔作者〕読んしらず(古今和歌集 巻第一 春歌上32)

## 新和様半紙

左の短歌を、半紙を縦使用、自運縦書き。

(漢字・かなの書き換え自由、歴史的仮名遣いは尊重)

ビードロの駕をつくりて雪つもる白銀の野を行かんとぞ思ふ

〔大意〕ガラスの馬車に乗って、雪の積もる白銀の野をどこまでも走ってみたい。

〔作者〕正岡子規(一八六七～一九〇二)

〔出典〕日本近代文学体系16「正岡子規集」

| 3月号課題予告 |                             |            |  |  |
|---------|-----------------------------|------------|--|--|
| 漢字半紙    | 空翠落庭陰                       | (鳴鶴作品草稿集Ⅰ) |  |  |
| かな半紙    | とどむべきものはなしにはかなくも散る花ここにたぐふ心か | (古今和歌集132) |  |  |
| 新和様半紙   | から歌につくりてめでし君が庵の梅の林は今咲くらんか   | (正岡子規)     |  |  |
| 漢字条幅    | 琴瑟和偕五十年 人間福壽乃雙全             | (鳴鶴詩稿集)    |  |  |
| かな条幅    | 桜咲く遠山鳥のしだり尾のながながし日もあかぬかな    | (新古今和歌集99) |  |  |
| 新和様条幅   | 白木蓮の花咲きたりと話す声何処やらにして日の永きかな  | (北原白秋)     |  |  |

※課題及び課題の文字は変更することもあります。

## 漢字条幅

左の語句(後半十四字)を、画仙紙半折(136cm×35cm)を縦使用、自運縦書き。(書体自由)

蕭寺逢年物外情 朝来無客賀新正  
梵鐘百八醒塵夢 便是陽春第一聲

梵鐘百八醒塵夢  
便是陽春第一聲

〔読み〕梵鐘百八塵夢を醒ます。便ち是れ陽春の第一聲なりと。

〔大意〕梵鐘が百八回響き、夢まぼろしの世から目覚める。これこそ春の訪れを知らせる第一声である。

〔出典〕「鳴鶴詩稿集」より明治癸卯詩稿「鎌倉圓覺寺迎歳」

## かな条幅

左の和歌を、画仙紙半折(136cm×35cm)を縦使用、自運縦書き。

(変体がなの使用、漢字・かなの書き換え自由)

明日からは若菜摘まんとしめし野に昨日も今日も雪は降りつつ

〔大意〕明日からは若菜を摘もうと標を張っておいたのに、昨日も今日も雪が降っているよ。

〔出典〕新古今和歌集 巻第一 春歌上11 山邊赤人

## 新和様条幅

左の短歌を、画仙紙半折(136cm×35cm)を縦使用、自運縦書き。

(漢字・かなの書き換え自由、歴史的仮名遣いは尊重)

山路来てひたすらひもじ路の葉に満ちあふれる光を見れば

〔大意〕山道を登ってきて、道端で路の葉に光っている露を見ると、(おいしい食べ物に見えて)とても空腹を感じた。

〔作者〕北原白秋(一八八五～一九四二)

〔出典〕北原白秋歌集より「海阪」(岩波文庫)

自運Ⅱ与えられた課題語句を自運作品として用紙と筆を選び墨の磨り工合を工夫し、書作品として造型すること。それ故、先生に手本を書いてもらうことは避けたい。作品制作に当っては、古典からの集字などを試みて始めるのもよい。参考図書としては、現代字体字典(講談社)、五體字類(西東書房)、大字典(講談社)、古典かな字鑑(書藝文化新社)、広辞苑(岩波書店)、古語辞典(旺文社)などを見たい。

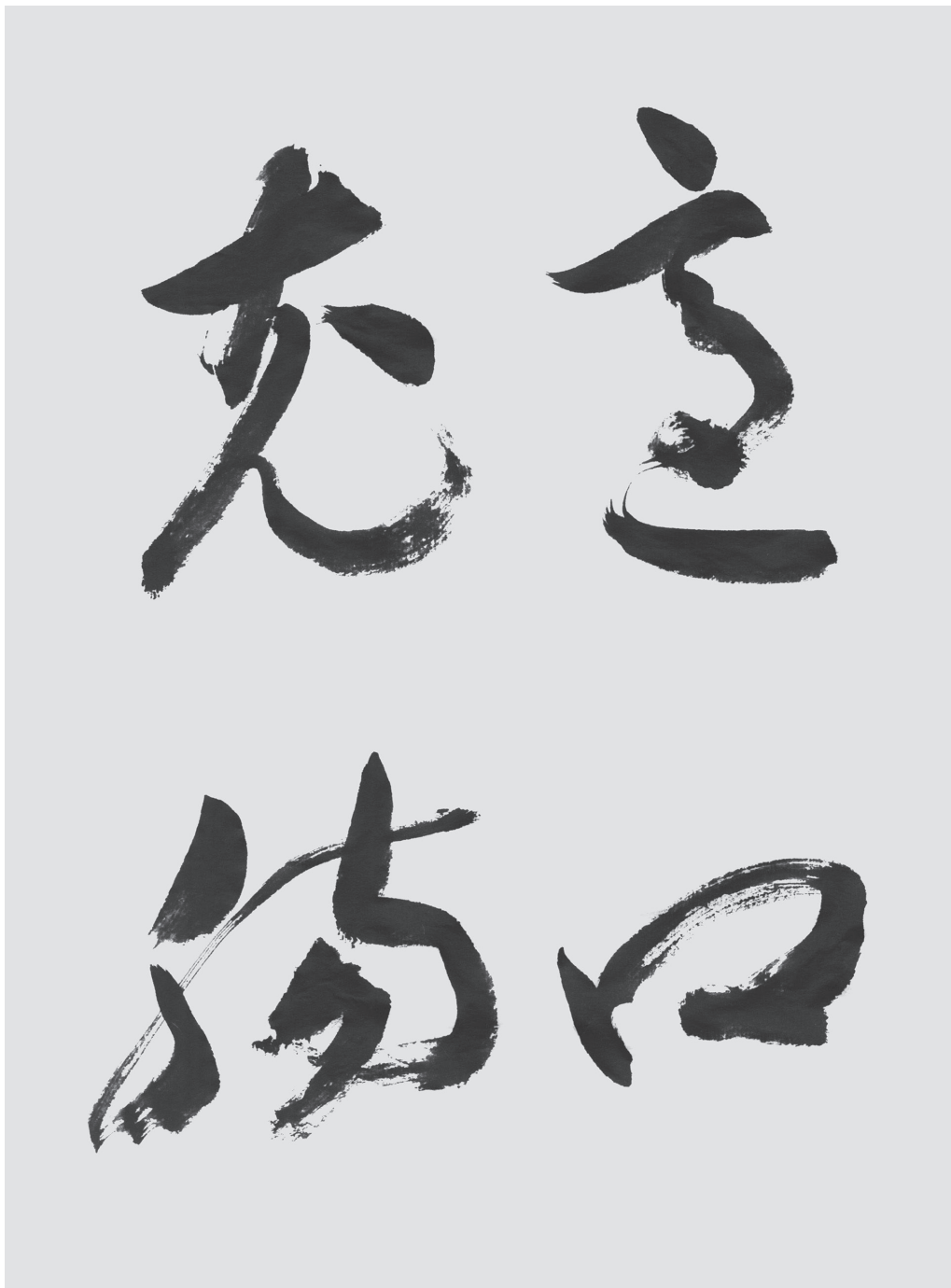
真草千字文（真蹟本）

(寓目) グウモク 囊箱 ノウソウ 易輶攸畏 イユウユウイ 屬耳垣墻 シヨクジエンシヨウ 具膳飡飯 グゼンサンハン 適口充腸 テキコウジュウチヨウ 飽飫 ホウヨ (烹宰) ホウサイ

囊箱易輶攸畏屬耳垣墻  
 素飡易輶攸畏屬耳垣墻  
 具膳飡飯適口充腸飽飯  
 里膳飡飯適口充腸飽飯

(目を) のうそ 囊箱に (寓す) いゆう 易輶は畏るる攸、みみ 耳を垣墻に属く。膳を具し、はん 飯を餐い、口に適い腸を充たす。飽きては (烹宰をも) いと 飫う。





【用具・用材】

筆 永昌五号  
墨 顕微無間  
紙 松雪

『真草千字文』

隋 智永 真草千字文 真蹟本  
第二二二句目

適口充腸 (口に適い腸を充たす)  
(語 釈)

適ハ意ノ必ス從フ所ヲ謂フ口ハ言語飲食ノ官ナリ充ハ満ナリ腸ハ腹臟ナリ是レ食餌ハ生命ノ繫ル所ニシテ一日モ廢ス可ラサルモノト雖モ亦節制ナカル可ラス膳食之レ口舌ニ適ハシメ之レヲ啖<sup>チ</sup>之レヲ啜<sup>チ</sup>リ以テ胃腸ニ充タシムヘク空腹ニ失シ多食ニ過クルモノハ共ニ攝養ノ道ニ非ス其宜シク謹ムヘキヲ謂フナリ

〈大意〉

前句の具膳飡飯に続く。食べ物が口に合い、腹がふくればよく、ご馳走を食べるに及ばない。腸は腸に同じ。白駒食場の「場」と同様に旁を易のように書いている。故に周発殷湯の「湯」や白駒食場の「場」とは草書形に違いが見られる。

〈解説〉

○草書でも点画それぞれに起筆、送筆、収筆があることを見取ろう。手と指を使つての指法を用いての俯仰法で書こう。

適…形は「高」に之繞のように書く。鍋蓋の下に平がなの「る」を指法で書き、之繞は筆の鋒先を当て、その儘押すが如く書く。

口…遅速の変化を見せる。

充…形は克に似るが、第二画目から三画目へは指法により鋒先の位置を移す。これが出来なければ草書にならぬ。

腸…ニクヅキは俯仰法を用いて旁に向かい、同様に筆の面を変えながら骨力をつけて連筆する。

(習い方は26ページ)



漢字半紙（1級～5級）

『真草千字文 真蹟本』より「適口充腸」の四字の臨書

石橋鯉城臨

適口充腸

『真草千字文』

隋 智永 真草千字文 真蹟本

第二〇二句目

適口充腸（口に適い腸を充たす）

〈大意〉

前句の具膳飡飯に続く。料理をそろえ、食事をするにも、口に適って腹を充たせればそれでよい。

〈習い方〉

○坐法、姿勢、執筆を工夫しタダスこと。両足の位置は揃えずに右足を前に、爪先を立て坐し、前傾姿勢を容易にする。

○用具を選び、磨墨の適切を図り、効果的な表現を心掛ける。

○形も大事だが、筆遣いを学んで線を作り、自分の書き方が出来るよう繰り返し習いたい。

適：口は向勢に、口は引き締める。之繞はリズムよく重ねる。

口：やや行意を持たせ小ぶりながらも存在感のある表情のある線。

充：左払は横に筆を入れ、進む方向に身体を傾けて直筆で。最終画のし（浮鷺という）は、抜くようにして下に向かい、鋒先をまとめてから曲がる。

腸：腸に同じ。直筆で引き締める。偏旁の發ねに変化をつける。

（習い方は26ページ）

適口充腸

【用具・用材】

筆：書学院五号廻腕筆

墨：顕微無間

紙：松雪

漢字半紙（6級～10級）

「令和五年」の四字を書きなさい。「令和」の二字を書いたの提出も可。

石橋鯉城書

令和五年

【用具・用材】

筆 書学院五号廻腕筆

墨 和墨

紙 漢字用半紙

令和五年  
レイワゴネン

〈解説〉

○新元号「令和」になってから五年目を迎える。令和に込められた優雅な雰囲気と大らかさを現出したい。

○坐法を正し、臍下丹田に重心を置いて姿勢執筆の「型」を整える。

○筆の鋒先の弾力を利し、腕の開閉自在にして点画をつくり運筆する。

○色々な書き方があるが、今回は鄭道昭風に書いた。意前筆後（先に体が動いて後から筆がついてくる）を心懸ける。

〈書き方〉

令…「人」（ひとがしら）と「冫」の組合せ。ひとがしらは、鳥が翼を大きく広げて空に羽ばたくようにゆつたりとつくる。

和…「禾」（のぎへん）の右側は「口」にぶつからないように揃える（相譲相避の法則）。「口」の位置に留意する。

五…一画目はやや仰ぎ、三画目の点折は腕を開いて点を打ち、方向を変えて斜めに引く。最終画は長めに伏せる。

年…三画目まで一氣に続ける。点で締め、五画目の長大画を書く。最後の縦画は体を前傾し、その戻りでゆつくり引く（往還の原理）。

（習い方は27ページ）



左の『関戸本古今集』より「暗ふ山」から「し流久曾あ利介流」までの五行を、半紙を縦に使用して臨書しなさい。

※原寸には拘らなくてよい。

(原寸)

『関戸本古今和歌集』

〈読み〉

暗ふ山<sup>に</sup>てよめる貫之  
無<sup>む</sup>めの花<sup>は</sup>匂<sup>に</sup>春<sup>は</sup>邊<sup>は</sup>九<sup>く</sup>らふ  
山<sup>み</sup>や三<sup>み</sup>尔<sup>に</sup>こゆれとし  
流<sup>る</sup>久<sup>く</sup>曾<sup>そ</sup>あ利<sup>り</sup>介<sup>け</sup>流<sup>る</sup>

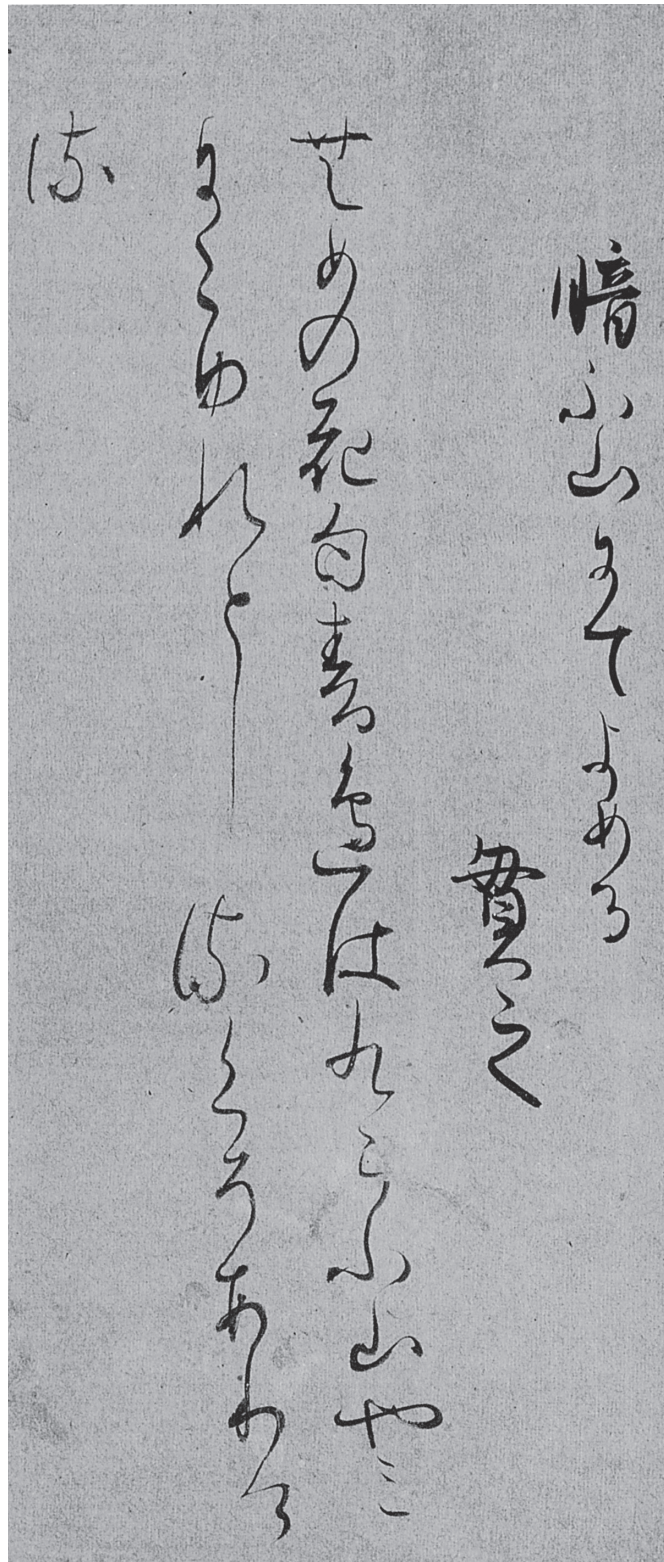
〈大意〉

梅の花の香りが漂う春の頃は、  
くらぶの山を闇の中で越えて  
も、花の存在がはつきりとわ  
かる。

(古今和歌集

巻第一 春歌上 39)

くらぶ山にてよめる貫之 梅の花匂ふ春べはくらぶ山闇に越ゆれどしるくぞありける



〈解説〉

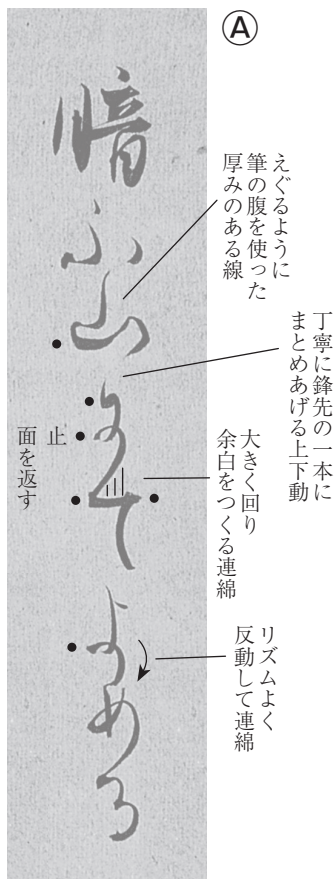
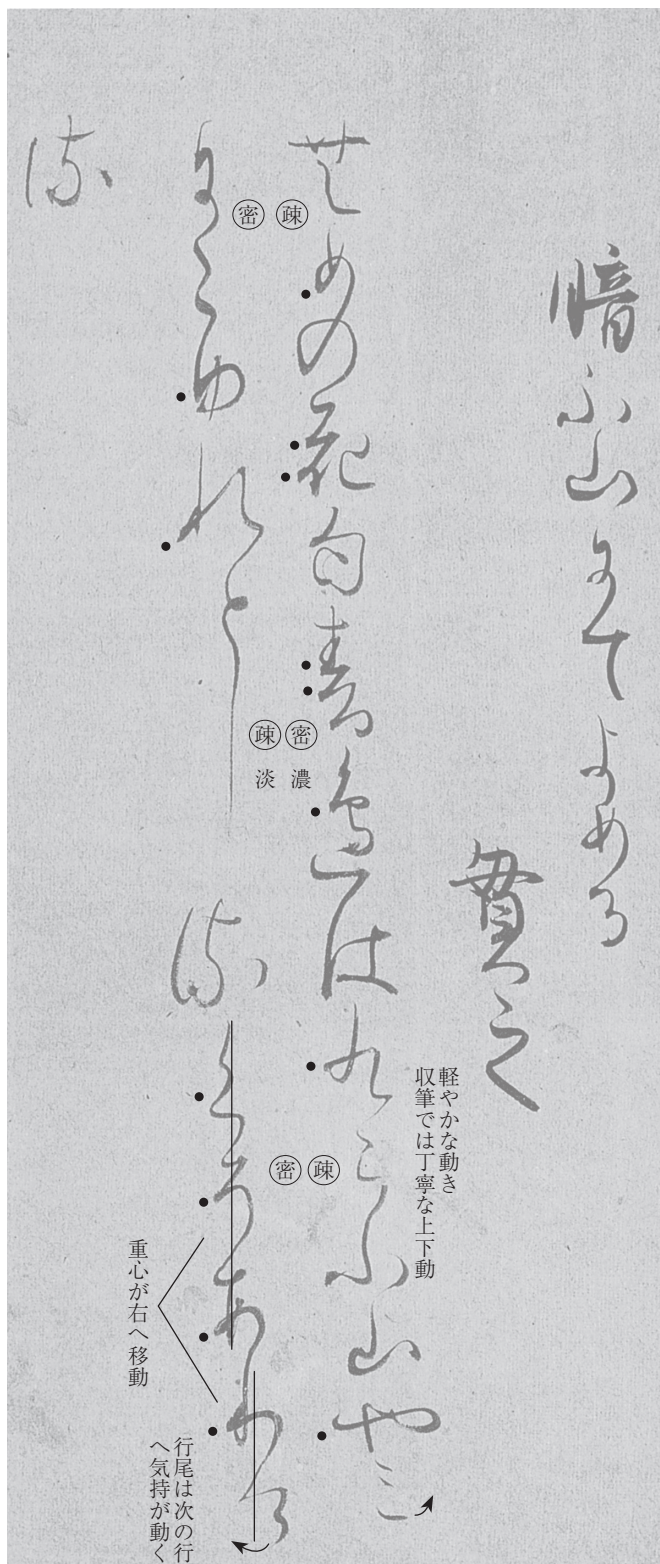
今月も関戸本の臨書です。  
まず声を出して読みましょ  
う。歌の理解は勿論、文意の  
切れ目（大抵、連綿の切れ  
目）で自然に息づきをしてい  
ませんか。筆者の呼吸や運筆  
のリズムを実感できますね。

全体的には、たっぷりの墨と  
強い筆圧でグイグイと突っ込  
むタッチが目立ちますが、上  
下動で鋒先の毛を一本迄丁寧  
にまとめた細線の存在を忘れ  
てはなりません（A）。又隣  
りあう行とのバランスも絶妙  
です。じっくりと観察し、味  
わい、変体がな等理解してか  
ら筆を持ちましょう。

【用具・用材】

筆Ⅱ かな用小筆  
墨Ⅱ かな用和墨  
紙Ⅱ かな用雁皮

（八尋光華）



筆の動き（筆路）



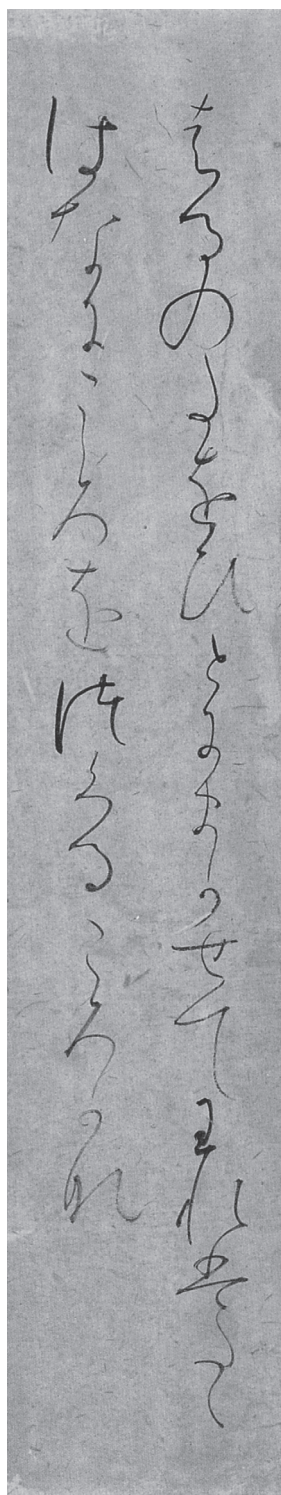
・筆の面を返す。  
他にもありますので見付けましょう。



かな半紙（1級～5級）

左の『粘葉本和漢朗詠集』より「者るの多を」から「徒久るころ可那」までを、半紙を縦に使用して臨書しなさい。

※原寸には拘らなくてよい。



（原寸）

春の田を人にまかせてわれはたゞ花に心をつくるころかな

『粘葉本和漢朗詠集』

（巻下 田家 569 齋宮内侍）

〈読み〉

者<sup>は</sup>るの多<sup>た</sup>をひと<sup>に</sup>末<sup>ま</sup>可<sup>か</sup>せて王<sup>わ</sup>  
れ盤<sup>は</sup>多<sup>た</sup>、はな<sup>は</sup>るこ<sup>こ</sup>ろを徒<sup>つ</sup>久<sup>く</sup>  
るころ可<sup>か</sup>那<sup>な</sup>

〈大意〉

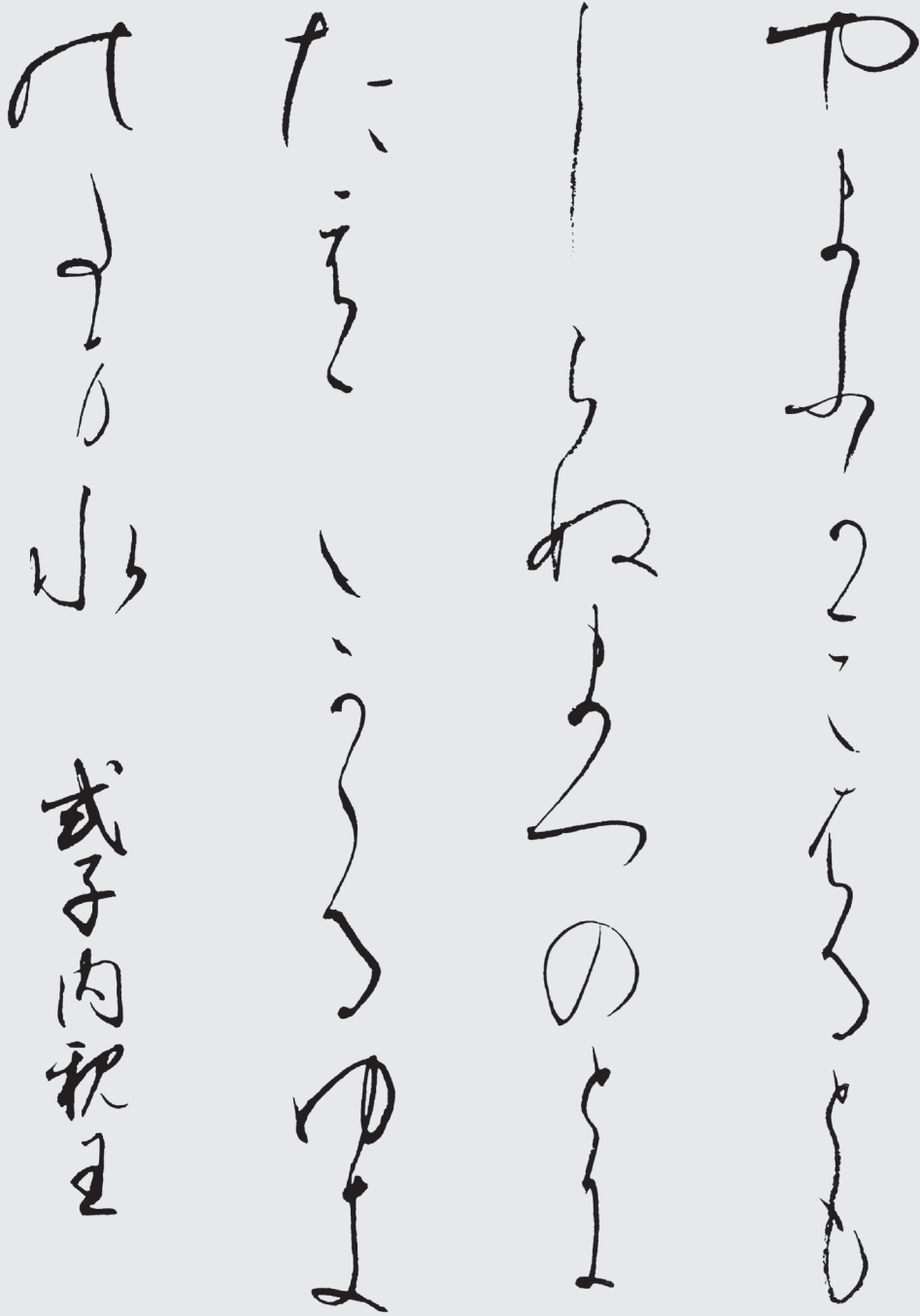
春の田の仕事は人に任せて、  
渡しは桜の花にひたすら心を  
奪われ、そぞろ歩きしている  
今日この頃です。





かな半紙(6級〜10級)

左の図版の「や末ふ可三」から「式子内親王」までを半紙を縦に使用して体裁よく書きなさい。



や末ふ可三者<sup>まかみは</sup>るとも  
たえゝゝ可<sup>か</sup>ゝるゆ支<sup>き</sup>  
能<sup>の</sup>多<sup>た</sup>万<sup>ま</sup>水<sup>みづ</sup>  
式子内親王

〈出典〉

梅雪かな帖中  
(新古今和歌集 卷第一 春歌上3)

〈読み〉

山深み 春とも知らぬ  
松の戸に たいだえかかる  
雪の玉水 式子内親王

〈大意〉

山が深いので春だともわからない庵の松の戸に、とぎれとぎれに落ちかかる美しい雪の雫よ。

〈解説〉

今月は、和歌一首とその作者を、基本の形式の四行書きにします。

四行書きでは、行間はほぼ均等で、行の長さは四行目だけが短く、その下に作者名を少し小さい文字で入れます。

初めに和歌を読んで、大意・言葉・変体がなの書き方などを予め理解しておきます。

先月までの連綿の練習とは、紙面全体の流れがある点が大きく異なります。墨量の変化(潤渴)をよく観察してから書き始めましょう。含墨の位置まで墨を継がずに書けるように、墨の量を上手に調整して下さい。

(川島史子)

【用具・用材】

筆 かな細字用筆  
墨 かな用和墨  
紙 かな用半紙

(習い方は27ページ)

永井香樹書

春色人を悩まして眠り得ず  
月は花の影を移して欄干に上らしむ



〈出典〉

「中國詩人選集」より  
王安石詩

〈解説〉

○音読して、構成を自分なりにイメージしてみよう。

○文字数が多いので、余白・渴筆・大小・太細等に変化をもたせ、明るくまとめよう。

○頑張りすぎないように、また萎縮しないように書きこんでください。字幅に変化をつけてすっきりさせる工夫をしましょう。

○教室名・氏名の行と本文との間の行間をとりましょう。

○教室名・氏名の行は、本文を活かす大きさ・墨量に留意しましょう。

【用具・用材】

筆Ⅱ和筆小筆 全部おろす  
墨Ⅱ和墨  
紙Ⅱ手漉漢字用半紙

春色人を悩まして眠り得ず  
月は花の影を移して欄干に上らしむ

（習い方は27ページ）



路もなし 綺楼傑閣 梅の花

路もなし 綺楼傑閣 梅の花

※予告と変わっております。

〈作者〉

夏目漱石（一八六七〜一九一六）

〈大意〉

路もないような場所に、ふうがわりで大きな建物が見え、その傍には梅の木があつて可憐な花が咲いていた。

〈解説〉

○濃く磨った墨を水で薄めて淡墨を作り、墨色の変化を楽しみながら書きたい。

○半紙用の筆で、鋒先の弾力を使って書く。

○横画は軽快に、縦画は筆の重さでゆつくりと運筆する。

○文字の概形を掴み、大小、字間、潤渇に留意し、点画の響きにも配慮したい。

【用具・用材】

筆 羊毫超長鋒

墨 和墨

紙 松雪

（習い方は27ページ）

〈 清 書 用 紙 〉

|     |  |  |  |
|-----|--|--|--|
| 教室名 |  |  |  |
| 氏 名 |  |  |  |

月 別  
出品券  
を貼る

・月別出品券（65 ページ）とバーコード出品券（段級欄に「実用」と記入して、月別出品券の下に）を左下に貼付してください。

↓バーコード出品券はこの下に貼ってください

実用書（随意課題）

立春 余寒 残寒 晩寒 向春／春とは名のみの寒さでございます／余寒なおきびしゅうございますが

切りとって提出してください（コピーも可）

立春 余寒 残寒 晩寒 向春  
春とは名のみの寒さでございます  
余寒なおきびしゅうございますが

佐藤友理書

○手本のペン字を必ず小筆で書くこと。  
文字の大小の具合に気をつけたい。

○出品用紙は、左側に示した清書用紙でも、これをコピーして書いても結構です。洋紙に書くことをここでは原則とします。

〈参考の小筆〉

・玉梓・下筆春蚕食葉声・選毫圓健

※詳しくは三多軒へお問い合わせください。

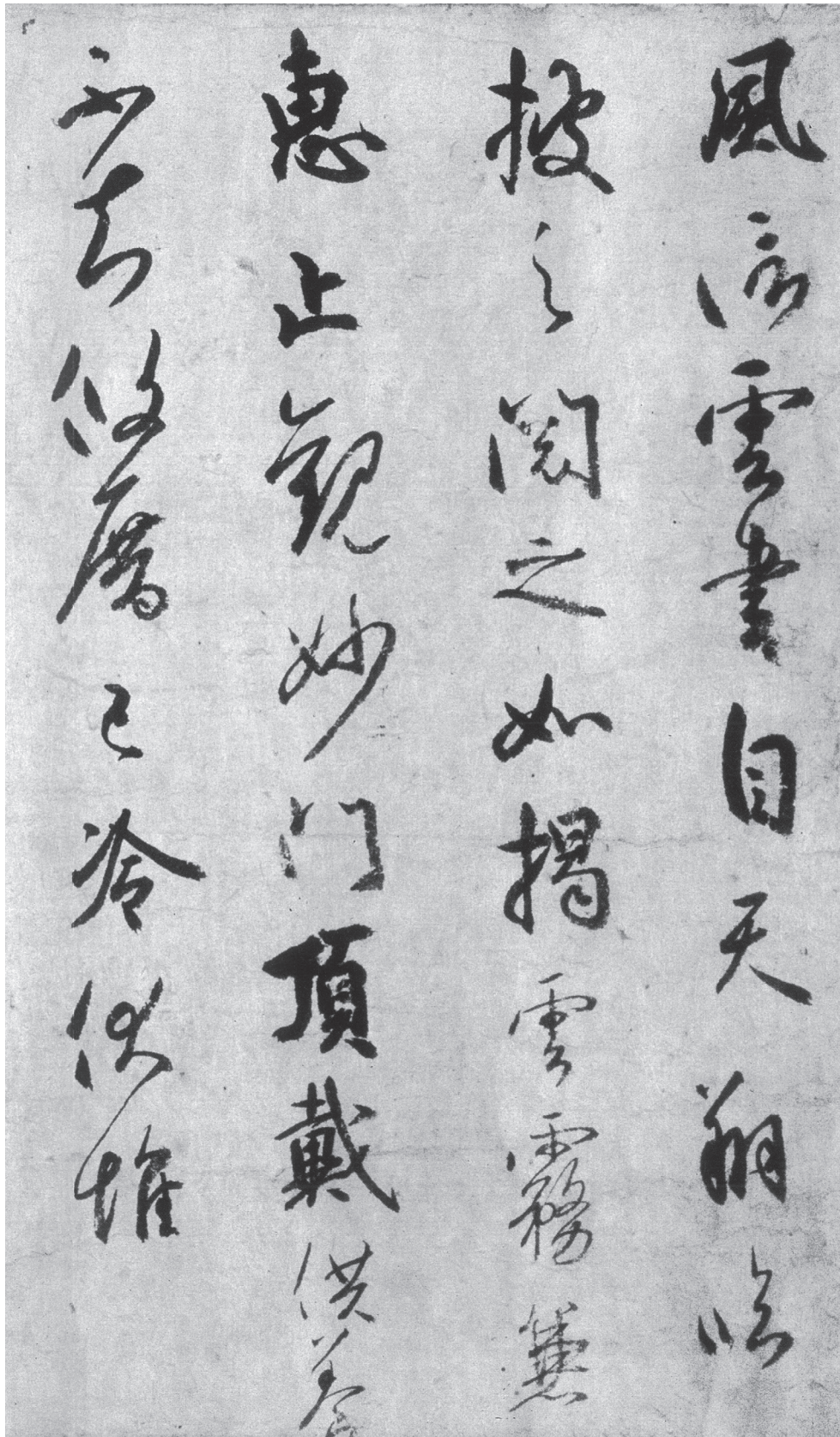
TEL：〇三（三三六五）五四九三  
FAX：〇三（三三三九）八二七三



風信帖

(25ページ参照)

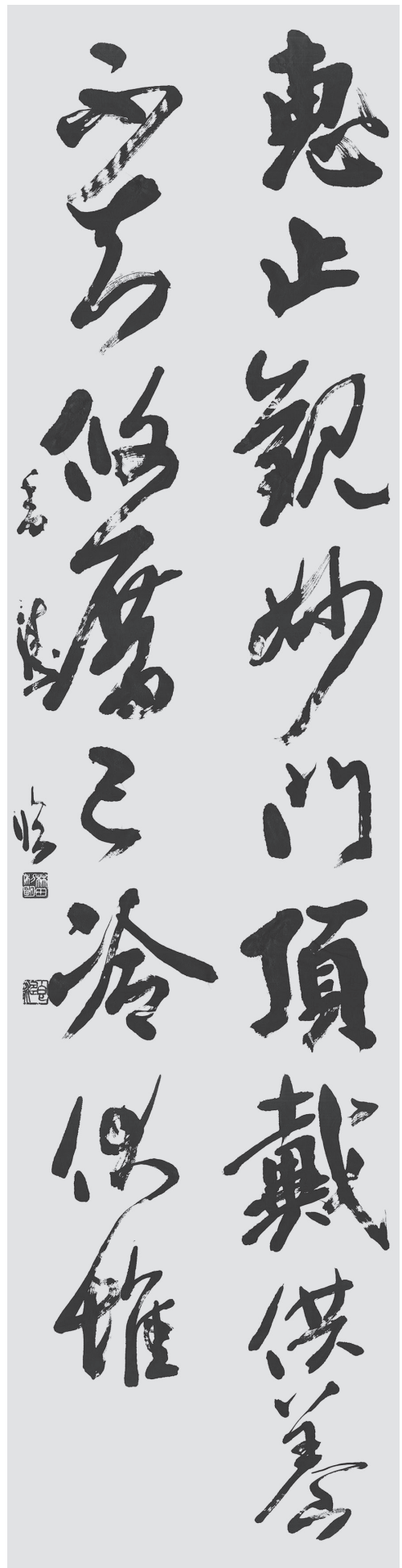
風信雲書 自天翔臨 披之閱之 如揭雲霧 魚 惠止觀妙門 頂戴供養 不知攸厝 已冷伏惟



風信雲書、天より翔臨す。之を披き、之を閲するに、  
止觀の妙門を惠まる。頂戴供養し、厝く攸を知らず。  
雲霧を掲ぐるが如し。兼ねて  
已に冷ゆ。伏して惟ふに、

漢字条幅 専門部（五段〜準初段） 風信帖より「恵止観妙門」から「已冷伏惟」までを臨書しなさい。

（用紙 画仙紙半折・たて 136 cm × よこ 35 cm）



恵止観妙門頂戴供養不知攸厝已冷伏惟

〔読み〕 止観の妙門を恵まる。頂戴供養し、厝く攸を知らず。已に冷ゆ。伏して惟ふに、〔作者〕空海（七〇九〜七八五）

〔大意〕 摩訶止観の妙法を御授け下され、頂戴し、供養いたします。身の置き場もない程感謝しております。もうだいぶ寒くなりましたがお体は如何かと案じております。

（解説は28ページ）

漢字条幅（1級〜10級）

参考手本

（用紙 画仙紙半折・たて 136 cm × よこ 35 cm）



浮雲遊子意

〔読み〕 浮雲遊子の意 〔作者〕李白（七〇一〜七六二）

〔出典〕中國詩人選集「送友人」

〔大意〕 空に浮かぶ雲は旅人の心か。

（解説は28ページ）

小久保嶺石書

林田香濤臨

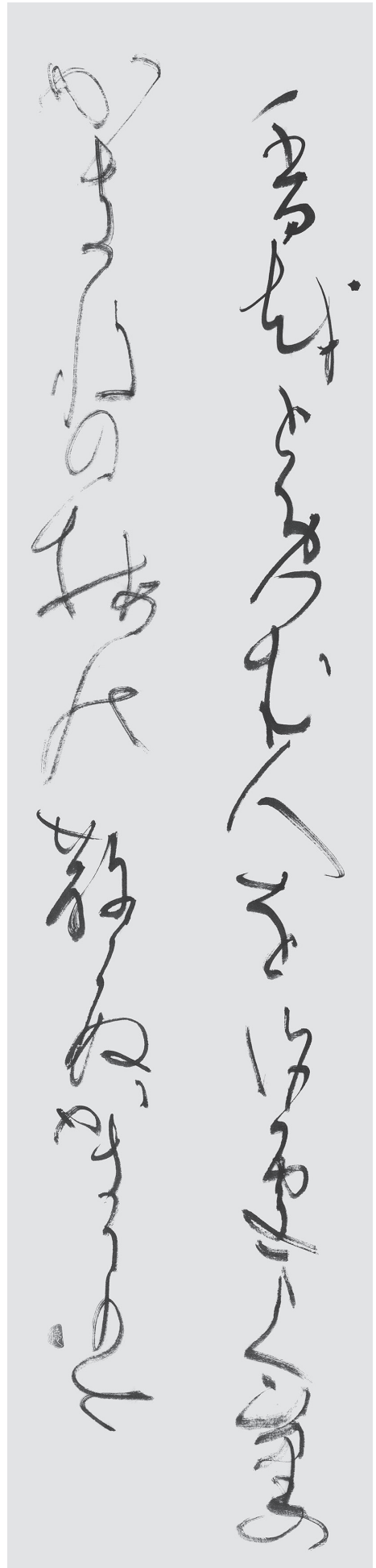


かな条幅 専門部（五段〜準初段）

参考手本

※変体がなの使用、漢字・かなの書き換え自由

（用紙かな用画仙紙半折・たて136cm×よこ35cm）



中村清徳書

香をとめむ人をこそまで山里のかきねの梅のちらぬかぎりは

〔読み〕香越と免む人を許處万弓山里の か支襦の梅能散らぬか支り盤

〔出典〕山家集（西行） 岩波文庫 佐佐木信綱校訂

〔大意〕山里にすむ自分の家の垣根の梅がすっかり散ってしまわない限りは、梅の香を求めてやって来る人の来訪を期待しましょう。

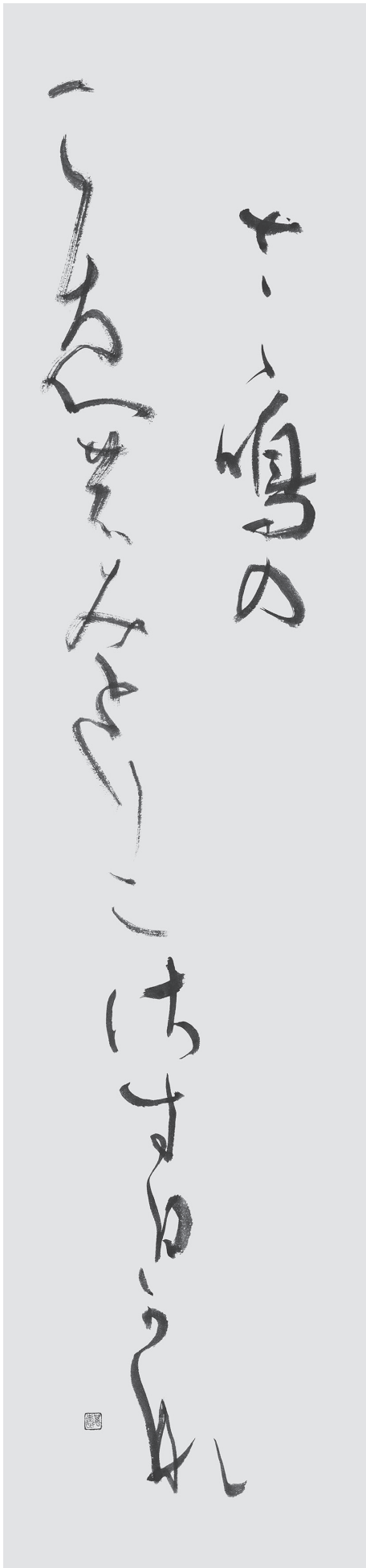
（解説は28ページ）

かな条幅（1級〜10級）

参考手本

※変体がなの使用、漢字・かなの書き換え自由

（用紙かな用画仙紙半折・たて136cm×よこ35cm）



須山万寿書

笛鳴の声のみどりにさす日かな

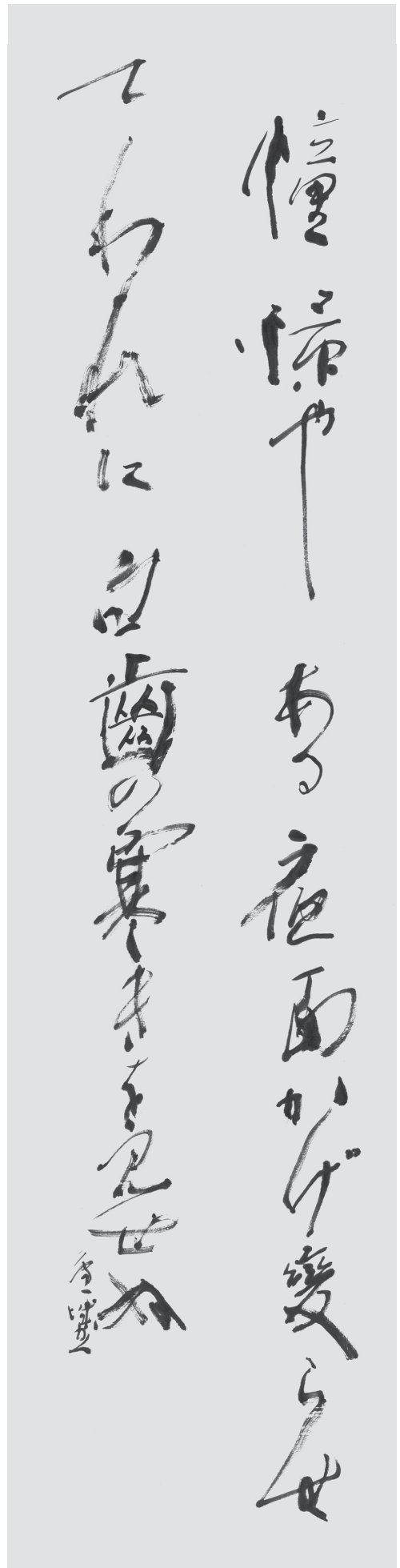
〔読み〕さゝ鳴のこ恵農みとり二佐す日可那

〔出典〕飯田 龍太 「日吉閑話」 鷹羽狩行編

〔大意〕冬の陽射しの中で鶯の地鳴を耳にして冬枯れの中にひそんでいる草萌えを感じている。

（解説は28ページ）





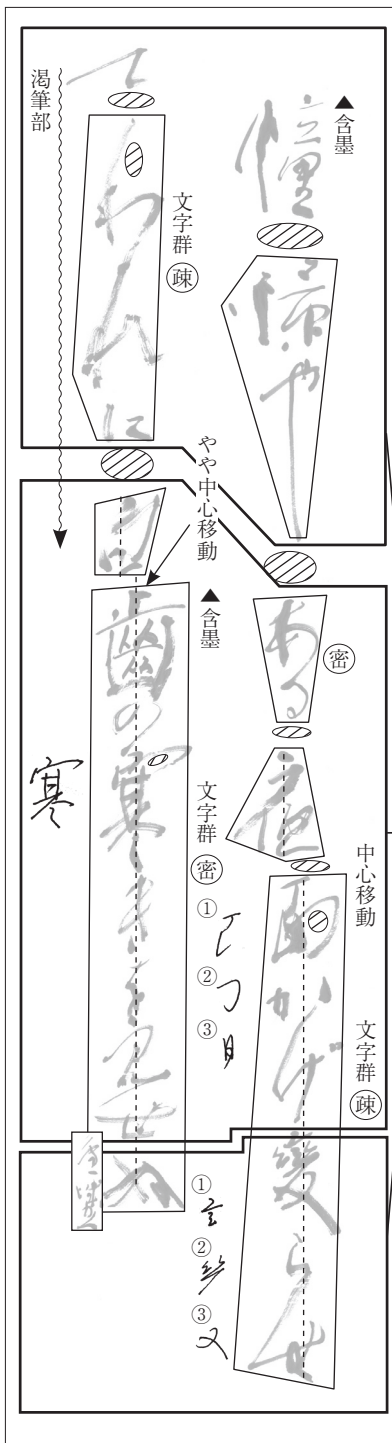
石橋鯉城書

憧<sup>あこがれ</sup>憬やある夜<sup>おも</sup>面かげ變らせてわれに白齒の寒きを見せぬ

〈作者〉窪田空穂（一八七七〜一九六七） 〈出典〉『まひる野』（現代文学体系）

〈大意〉憧憬は、ある夜姿を変えて、白い歯をむくように私に冷たい印象をもたらした。

文字群と全体を三段に分けての空間処理法をつかむ



#### 〈解説〉

- 縦書きの二行書き作品です。
- 書き出しを少し下げて、上部に少し空間を残し、二行目の下部の余白と対称させています。
- 行間を取り、それに併せて紙面の左右に余白を残して明るい作品としましょう。
- 全体を文字群の集合体としてまとめ、「歯の寒きを見せぬ」を一直線上に密にして引き締める。
- 空間処理のコツは、文字の大小・太細・潤渴の変化に見られ、それらに留意して中心線の移動や流れを掴んで書いてみましょう。

#### 【用具・用材】

筆Ⅱ羊毫超長鋒  
墨Ⅱ和墨 紙Ⅱ本画箋紙

菩薩及國土～欲從淨華宿の百九十二字を清書して出品。

菩薩及國土生下劣想妙音菩薩白其佛  
言世尊我今詣娑婆世界皆是如來之力  
如來神通遊戲如來功德智慧莊嚴於是  
妙音菩薩不起于坐身不動搖而入三昧  
以三昧力於耆闍崛山去法座不遠化作  
八萬四千衆寶蓮華閻浮檀金為莖白銀

（若佛）

菩薩。及國土。生下劣想。妙音菩薩。白其佛言。  
世尊。我今詣娑婆世界。皆是如來之力。如來神  
通遊戲。如來功德。智慧莊嚴。於是妙音菩薩。  
不起于坐。身不動搖。而入三昧。以三昧力。於  
耆闍崛山。去法座不遠。化作八萬四千。衆寶蓮華。  
閻浮檀金為莖。白銀

（彼の国を輕しめて若しくは仏・菩薩及び国土に下劣の想を生ずることなかれ。

妙音菩薩、其の仏に白して言わく、「世尊よ、我今娑婆世界に詣らんこと、皆是れ如  
來の力・如來の神通遊戲・如來の功德・智慧の莊嚴なり」と。  
是に妙音菩薩、座を起たず身動搖せずして三昧に入り、三昧の力を以て耆闍崛山に  
於て法座を去ること遠からずして、八万四千の衆宝の蓮華を化作せり。閻浮檀金を莖  
とし、白銀を

# 解説

1 先ずは、20頁の3行目「遊  
戲」、6行目の「白銀」の  
部分に注目したい。

2 「遊戲」では唐様の素晴し  
い筆跡を見せている。「白  
銀」では和様を想起させて  
くれる。

3 此処では、この二つの部  
分を取り出して二字を額風  
に仕立てみると次のように  
なる。

4 隋唐の書の行草書の真跡  
は多く残されていないので、  
この部分に隋唐風の書風を  
見得るのは、まことに有難  
いことである。

## 6 〈語釈〉

耆闍崛山（ぎしゃくつせん）

…靈鷲山（りようじゆせん）  
の別名。靈山とも。

閻浮檀金（えんぶだんこん）

…閻浮樹の大森林を流れる  
川の中から出るといふ美  
しい砂金。

甄叔迦宝（けんしゆくかほう）

…甄叔迦という樹に咲く花  
の色に似た赤い寶石。



為葉。金剛為鬚。甄叔迦寶。以為其臺。爾時文殊師利法王子。見是蓮華。而白佛言。世尊。是何因緣。先現此瑞。有若干千萬(億)蓮華。閻浮檀金為莖。白銀為葉。金剛為鬚。甄叔迦寶。以為其臺。爾時釈迦牟尼佛。告文殊師利。是妙音菩薩摩訶薩。欲從淨華宿

葉とし、金剛を鬚とし、甄叔迦寶を以て其の臺と為せり。  
爾の時に文殊師利法王子、是の蓮華を見て、仏に白して言わく、「世尊よ、是れ何の因縁あつてか先ず此の瑞を現わすや。若干千万の蓮華有りて、閻浮檀金を莖とし、白銀を葉とし、金剛を鬚とし、甄叔迦寶を以て其の臺と為せり」と。  
爾の時に釈迦牟尼仏は文殊師利に告げたまわく、「是れ妙音菩薩摩訶薩、淨華宿(王智仏の…)

為葉金剛為鬚甄叔迦寶以為其臺爾時  
文殊師利法王子見是蓮華而白佛言世  
尊是何因緣先現此瑞有若干千萬億蓮  
華閻浮檀金為莖白銀為葉金剛為鬚甄  
叔迦寶以為其臺爾時釋迦牟尼佛告文  
殊師利是妙音菩薩摩訶薩欲從淨華宿

12

11

10

9

8

7

薩

菩

銀 白

戲 遊

全文音読して和漢混淆文の響きの美しさに触れましょう。  
図版中文字で、判然としないところは、經典の「釈文」中の同字の書き方に倣つて書きます。

清書の氏名の後に「謹寫」または「敬寫」の二字を書き添えます。



摩訶般若波羅蜜多心経  
 觀自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五  
 蘊皆空度一切苦厄舍利子色不異空空不  
 異色色即是空空即是色受想行識亦復如  
 是舍利子是諸法空相不生不滅不垢不淨  
 不增不減是故空中无色无受想行識无眼  
 耳鼻舌身意无色聲香味觸法无眼界乃至  
 无意識界无无明亦无无明盡乃至无老死  
 亦无老死盡无苦集滅道无智亦无得以无  
 所得故菩提薩埵依般若波羅蜜多故心无  
 罣礙无罣礙故无有恐怖遠離一切顛倒夢  
 想究竟涅槃三世諸佛依般若波羅蜜多故  
 得阿耨多羅三藐三菩提故知般若波羅蜜  
 多是大神咒是大明咒是无上咒是无等  
 咒能除一切苦真實不虛故說般若波羅蜜  
 多咒即說咒曰

※納経料を添えてご出品下さい

## お正月・元旦写経―心安らぐ一時を―

般若心経は今から一三〇〇年ほど前、中国（唐）の玄奘三蔵がインドを旅して持ち帰った経典を漢字に翻訳したもののひとつで、大般若経という長い経典の神髄が短くまとめられています。

### ■書道として写経を学ぶ際の留意点

文字の字形はやや扁平にしましょう。縦画は太くゆっくり、横画は細く速めに書くといいでしょう。

般若心経の場合、一時間ほどで書き上げられるようになるのが理想ですが、こうした注意点を踏まえ、なおかつ無心で書くことが大切です。まずは心を落ち着けて写経用紙に向かってみてください。

### ■写経の心構えと書式

・「為」の下には、個人的な願いごとがある場合に記入します。  
さいかいもちよく  
 ・「齋戒沐浴」とは、神聖な仕事に従うものが飲食や行動をつつしみ、からだを洗い心身を清めるという意味です。  
 ・もともと写経は「させていただく」種類のものです。常に謙虚な心を忘れずにいるためにも、必ず最後には「謹写」「敬写」「謹書」などの言葉を添えましょう。

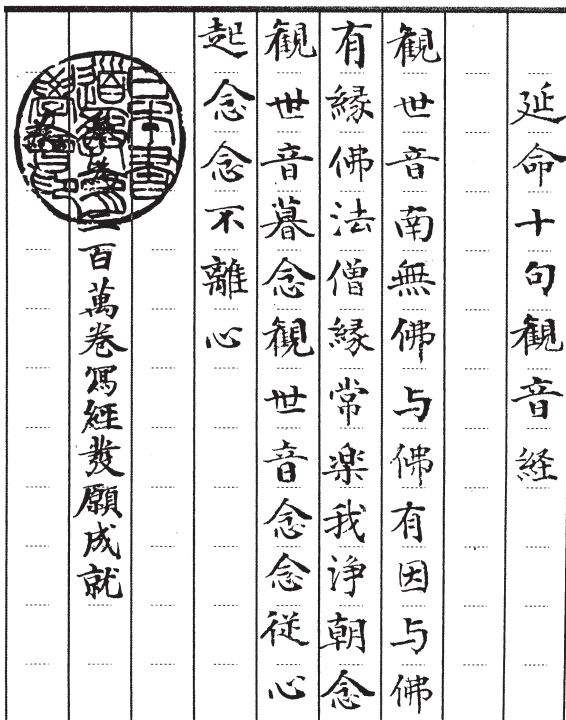
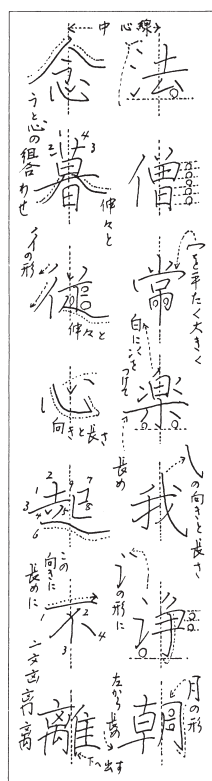
### ○納経された写経は

・お正月・元旦写経として皆様が浄写された御写経は、二〇二三年度供養祭（十月第一日曜日）にて懇ろに供養させていただきます。

### 〈納経の仕方について〉

・「延命十句観音経」「般若心経」を書きます。毛筆でも硬筆でもかまいません。受付は一月末日まで。

・納経寄付金は一巻につき五〇〇円です。なるべく郵便振替のご使用をお願いいたします。



〈大意〉  
観世音仏に南無したてまつる  
仏と因あり仏と縁あり仏と法  
と僧との縁によつて常・楽・  
我・浄の四徳を得ん朝な朝な  
に観世音を念じ夕な夕なに観  
世音を念じ念々、心より起こ  
り念々、心を離れず。

〈読み〉  
延命十句観音経  
観世音 南無佛 與佛有因  
與佛有縁 佛法僧縁 常樂  
我浄 朝念観世音 暮  
念観世音 念念從心起  
念念不離心

揭諦揭諦 波羅揭諦 波羅僧揭諦 菩提薩婆訶  
般若心經  
奉為二百萬卷寫經發願成就  
為 (お願いをしてお書きください)  
具條例  
● 家内安全 ● 身体健全  
● 大願成就 ● 学業成就 等

齋戒沐浴

氏名 謹寫

## 不二細字研究室 出品規定

月別出品料は無料です。  
(納経料は別途)

試験や月例競書にご出品の作品には、  
バーコード出品券と月別出品券を  
作品の左下に貼付してください。

■会友・準会友・八段～1級の方  
納経料Ⅱ五〇〇円 \*必ずご納経ください。

①本誌掲載の「法華経」または「般若心経」を書いて出品。

②発表された段級を(会友・準会友は赤、段は赤の漢数字、級は黒の算用数字で)  
バーコードに記入してください。

③昇格はしませんが、準会友より1級は天・地で評価されます。

■2級～10級の方

①「延命十句観音経」を書いて出品。

②2級以下は昇級者に○をつけて発表します。昇級者は次回、発表された二つ上の  
級位を(黒の算用数字で)バーコードに記入してください。

③初出品の方は10級で出品してください。

編入試験 細字研究室 編入試験料Ⅱ、四〇〇円

①2級～10級の課題を書いて出品。

②編入用バーコードに「編入」と赤で記入してください。

③審査後、相当段級に編入します。次回は発表された段級で出品してください。

④試験料免除については本誌「編入試験のご案内」に準じます。

■用紙「般若心経」用(20枚、100枚)「延命十句観音経」用(100枚)

三多軒で用意しております。(03-62606-1276)

【オンラインストア】www.santaken.com

〒101-8358 東京都千代田区西神田 一丁目三

公益財団法人日本書道教育学会「写経事務局」宛(傍線は赤で)

\*写経作品は他の月例競書とは別にして下さい。

■納経について

納経をご希望の方は一巻につき五〇〇円を郵便振替でご入金の上、  
「振替払込請求書兼受領証」を写経作品に添えてお送り下さい。

■お問い合わせ 03-3234-3919

■振替 口座番号 000401163592

加入者名 (財) 日本書道教育学会 写経事務局

\*令和三年四月一日より、口座番号が変更となりました。

\*納経料の振込手数料は各自負担となります。今までの振替用紙はお  
使いいただけます。郵便局に備え付けの振込用紙をお使い下さい。

お正月・元旦写経 納経連絡用紙

きりとり

公益財団法人日本書道教育学会  
二百萬卷写経実践推進委員会事務局

|                              |       |      |
|------------------------------|-------|------|
| 住<br>所                       | 納経者氏名 | ふりがな |
| 〒                            |       |      |
| 電話番号 ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) | 雅号    | ふりがな |

※初めて納経される方は、お写経を添えて一緒に写経事務局にお送りください。  
芳名録の作成に使用させていただきますので、ご協力ください。



## 不二篆刻研究室

▼規定…左の語句を刻しなさい。(朱白自由・大きさは4センチ角以内)

## 雲從龍

〈読み〉雲は龍に従う  
〈大意〉似た者同士がお互いを感じ合うこと。

▼随意…好きな語句を刻しなさい。(朱白自由・大きさは4センチ角以内)

○作品は「半紙横 $\frac{1}{2}$ 」を縦長にして体裁よく押印し、印影を提出。

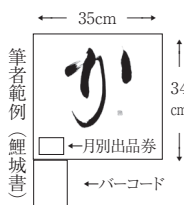
○巻末の出品要項をよく読んでご出品ください。

## 一字書

▼規定…左に示す漢字を一筆書として墨継ぎすることなく「書」しなさい。  
(書体自由)



〈読み〉「音」ウ・オウ 「訓」かもめ  
〈意味〉海鳥の一種。からだは白く、羽は青灰色。  
〈おすすめ用纸〉  
萬象 50枚 (夾宣)  
作品の左下に教室名・氏名・会員番号・段級を鉛筆で記入のこと。



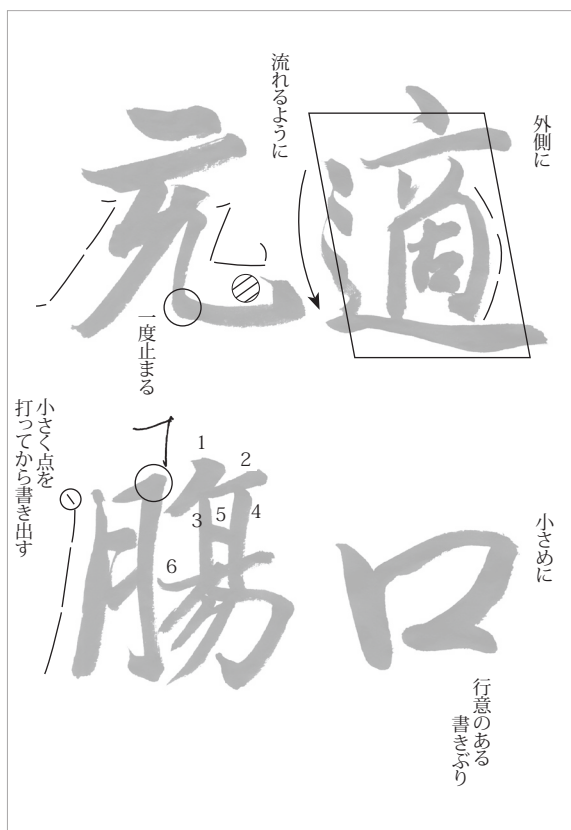
▼随意…左に示す平がなに運筆の呼吸を吹き込んで生命ある字に仕立てなさい。  
(書体自由)  
仮名の成り立ちや草書の「加」の書法、筆遣いも考えて創作すること。  
〈おすすめ用具・用材〉  
一字書 100枚 (夾宣)  
特選二字書 100枚 (夾宣)  
作品の左下に教室名・氏名・会員番号を鉛筆で記入のこと。

○バーコードは、段級欄に「二字書規定○段(級)または「一字書随意」と書いて貼付してください。(規定の方は段級を忘れずに)  
○落款は印のみか一字に雅印ぐらいで。  
○巻末の「競書出品要項」をよく読んでご出品ください。

## 課題解説

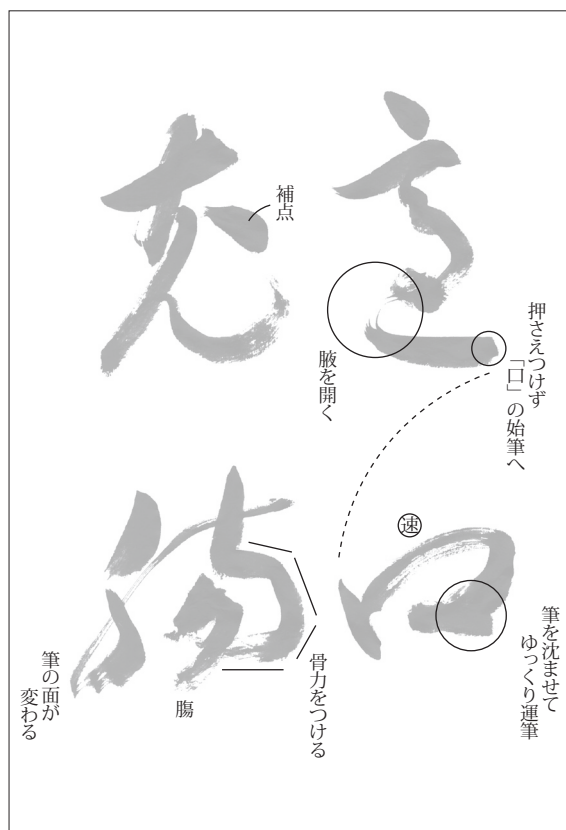
今月の出品期間  
1月4日(水)～1月11日(水)必着

漢字半紙 1級～5級 (真草千字文)



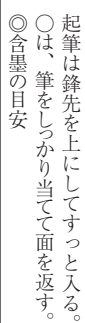
(石橋鯉城)

漢字半紙 五段～準初段 (真草千字文)



(石橋鯉城)

かな半紙 6級～10級



(川島史子解説)

## 漢字半紙 6級～10級



(石橋鯉城)

新和様半紙 1級～10級



(石橋鯉城)

新和様半紙 五段～準初段



(永井香樹)



# 書 蹟 解 説

『真草千字文』 P4

漢字半紙（五段）準初段・1級（5級）

梁の周興嗣がつくった千字文を真書（楷書）と草書の二体に書写したもので、毎行十字よりなり、標題二行と本文二百行、計二百二行ある。

筆者は隋の僧侶・智永（生没年不詳）。書聖・王羲之の七代の孫といわれる。智永は楷行草いずれの書体も能くし、彼の書への熱意は大変なもので、永欣寺に三十年間閉じこもって千字文を書き続け、使い古しの筆が大きな籠五杯分にもなったなどの伝説が伝わるほどの名品である。特に千字文をよく筆写し、遣隋使によって日本にも請来しているという。

『関戸本古今和歌集』 P8

かな半紙（五段）準初段

古今和歌集の写本で、加賀前田家旧蔵、のちに名古屋の関戸家に伝わったことから、この名称がある。緑・茶・紫などの鳥の子の染紙を糸綴じの冊子としたもので、もとは上下二冊であったとされている。十一世紀後半ころの書写と考えられ、伝藤原行成筆とされ、その書風は流麗で筆遣いに俯仰法が見られ、自然な筆致で潤渾の変化も美しい。なお、関戸家には巻一から巻二十まで四十八枚が、とびとびながら遺っている貴重な写本の一つである。

『粘葉本和漢朗詠集』 P10

かな半紙（1級）5級

藤原公任（九六六—一〇四一）の手になる朗詠用の歌集。四季別、主題別に漢詩と和歌を交互に記す珍しいスタイルの歌集である。

粘葉本はその写本の一つで、ページ同士を糊で次々と貼りつけて本にする「粘葉装」で装丁されていることからその名がある。現在は宮内庁三の丸尚蔵館に所蔵されている。書写者は平安時代の名書家、小野道風・藤原佐理と並び「三蹟」として著名な藤原行成（九七二—一〇二八）と伝えられている。

名筆家として讃えられた人物の筆と伝えられた本書は、その形の美しさや流れるような巧みな構成から、高野切と並びかな臨書に広く使われている。

『風信帖』 P16

漢字条幅（五段）準初段

空海が最澄に宛てた三通の手紙で、その冒頭に「風信雲書」とあるのでこの名がある。この尺牘はもと五通あったが、一通は関白秀次に献上し、また一通は盗難にあい、残りの三通が一巻となっている。三通それぞれの特色を有し、一つは用筆もつとも自然の妙を得た行書、一つは雄勁をもつてすぐれた行書、一つは明澄で白雲が秋空を流れるような草書である。

## ◆次号3月号課題予告

かな半紙

五段（準初段）たい志ら春よ三飛と志ら須い志者し  
流多きな久もか毛さ久ら若那を杓て  
毛てこむみぬ人の多め

（関戸本古今集）

（古今集巻第一 春歌上54）

1級（5級）……みわ多世はやな支さ久らをこ支末せて  
美やこ所八るの尔し支なり介る 素性

（粘葉本和漢朗詠集巻下 眺望630）

6級（10級）……田子能うらゆうち出て、みれ八末しろ  
尔そ富士能多可尔雪八ふりける

（梅雪かな帖）

新和様半紙

五段（準初段）九十歳にして猶其奥意を極め  
一百歳にして正に神妙ならんか

（葛飾北斎）

1級（10級）……神の住む春山白き雲を吐く

（夏目漱石）

漢字条幅

五段（準初段）風信帖臨書

1級（10級）……桃花帯雨濃

（李白）

かな条幅

五段（準初段）よしの山高嶺の櫻さきそめばからん  
ものか花の薄雲

（西行）

1級（10級）……未定

新和様条幅

五段（準初段）野の路をまがるとしてはかへり見ぬ杉  
の木蔭の壁白き家

（窪田空穂）

※課題は変更することがあります。  
※会友（準六段）の課題予告は2頁をご覧ください。

## 漢字条幅 五段く準初段

(林田香濤)

「風信帖」の臨書

空海が最澄へ宛てた書翰。この第一通は王羲之の影響を受けながら、線に厚味、豊かさがある。今シリーズはこの線の分厚さをどうとらえて表現していくかが目標。薄っぺらな線にならないことが肝要。

○藏鋒を用いながら、筆を沈ませていく。

○抑揚、緩急の変化を大切に運筆しよう。

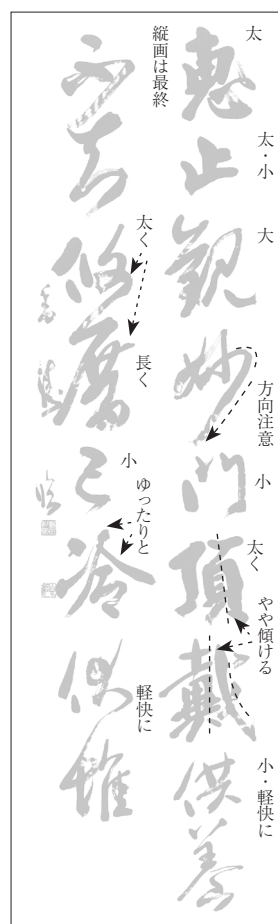
○変化は必要だが気脈が切れないように注意しよう。

※各行の字詰めは原帖のままとした。

〈用具・用材〉

筆Ⅱ和筆・羊毫筆 墨Ⅱ和墨・油煙

紙Ⅱ中国画仙紙



## 漢字条幅 1級く10級

(小久保嶺石)

○半切五文字作品として適切な用具、布置などを学ぶ。

○行書の基本的な筆遣いにより、脈絡を貫通させて書く。

浮…旁は図解に示したような①く④のリズムで書いて筆脈を貫通させる。

雲…雨冠は骨力をつけながら内側を広げる。「云」は重心移動させる。

遊…「方」は行書の筆順。ノ子は鋒先で軽く。之繞は右下に向かって二点打つ。

うにしてから、磔(永字八法の8番目)の三折をつくる。

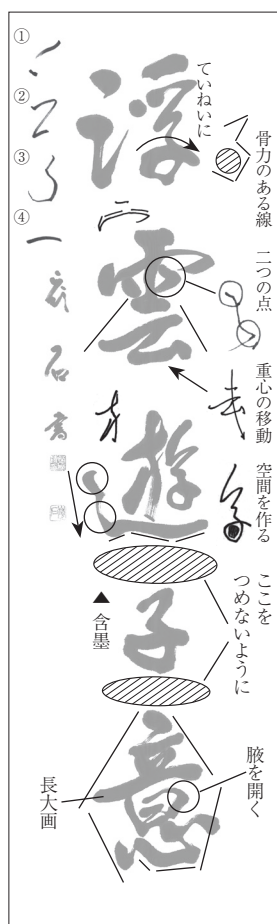
子…小さく太めに書くが、前後の文字との間の空きをつめないように。

意…「日」は鋒先で軽く。転折部は腋を開く。「心」は広がり過ぎないようにして終りの点を丁寧な打って安定させる。

〈用具・用材〉

筆Ⅱ羊毫中鋒 墨Ⅱ和墨

紙Ⅱ中国画仙紙



## かな条幅 五段く準初段

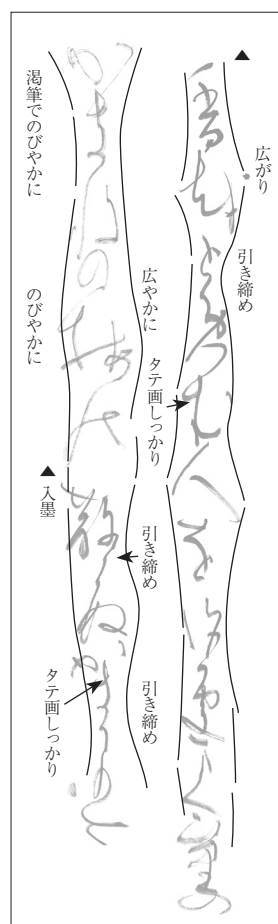
(中村清徳)

梅の香りを求めて来訪される方を思い浮かべつ、楽しく筆を運びましょう。

「香」は漢字で入墨。「越」で少し広がり。「と免」で引き締め「人」で広がりを。

以後変体がないを交えつ、行の振幅を交え運筆。二行目は渴筆で大らかに、一行目

自然な伸幅を考えた運筆



## かな条幅 1級く10級

(須山万寿)

○一行目は真直ぐに書きますが字間の広さをわずかに変えています。

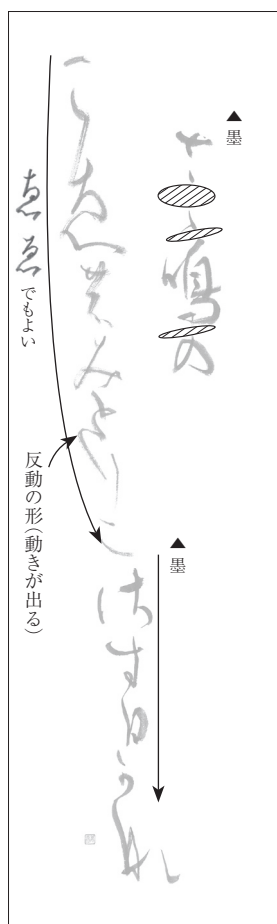
○二行目の「こ恵農みとり」は伸び伸びと少し弓なりに曲げ流します。「こ恵」は疎に、「みどり」は密に。「みとり」の「とり」の連綿は反動の形です。

○下五の「佐す日可那」は淡々と書き治めます。

〈用具・用材〉

筆Ⅱ羊毫筆 墨Ⅱ油煙墨

紙Ⅱ和画仙



全日本学生書道展と同時開催

書家の登龍門 厳正公平な作品本位の審査

# 第72回 書道學會展

**第一会場** 令和5年1月4日(水)～1月10日(火)

東京都美術館 2階第3・4展示室(東京都台東区上野公園8-36)  
午前9時30分～午後5時30分(入場は午後5時まで) 最終日は午後2時まで(入場は午後1時30分まで)

**第二会場** 令和5年1月4日(水)～1月10日(火)

東京芸術劇場 ギャラリー1(5階)(東京都豊島区西池袋1-8-1)  
午前10時～午後7時(入場は午後6時30分まで) 初日は午後3時から、最終日は午後5時まで

■部 門 創作(漢字・かな・新和様)・臨書(漢字・かな)・  
漢字造型(一字書・少字数書)・写経・篆刻

入場  
無料

【主催】公益財団法人 日本書道教育学会 【後援】文化庁・中国大使館・東京都・読売新聞社

※授賞式は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、特別賞受賞者のみを対象に執り行います。

東京都美術館にて書道學會展と同時開催

# 第72回 全日本学生書道展

**会 期** 令和5年1月4日(水)～1月10日(火)

◇会 場：東京都美術館 2階第2・3展示室(東京都台東区上野公園8-36)

◇時 間：午前9時30分～午後5時30分(入場は午後5時まで)

※最終日は午後2時まで(入場は午後1時30分まで)

◇主 催：公益財団法人 日本書道教育学会

◇後 援：文化庁・中国大使館・東京都教育委員会・読売新聞社・  
日本テレビ放送網株式会社

入場  
無料

※授賞式は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、特別賞受賞者のみを対象に執り行います。

～日本の伝統文化「書初」にご家族・団体でご出品を！～

## 令和5年 書初不二誌上展

締切  
間近！

出品期間：令和5年1月11日(水)～1月17日(火) 必着

表 彰

特選・金賞・銀賞・銅賞

特選・金賞には賞状及び賞品を、銀賞・銅賞には賞状を贈呈します。  
特選に選ばれた作品は不二各誌・べんの力3月号に写真版として掲載  
されます。

\*出品要項はホームページをご覧ください。右記のQRコードからもご覧いただけます。



＜ 送 り 先 ＞  
問 合 せ 先

〒101-8358 東京都千代田区西神田2-2-3  
公益財団法人日本書道教育学会 書初不二誌上展係

電話 03(3234)3956  
FAX 03(3234)3548

| 段 級   | 会員番号 |
|-------|------|
| 漢字半紙  |      |
| かな半紙  |      |
| 新和様半紙 |      |
| 漢字条幅  | 不二教室 |
| かな条幅  | 氏 名  |
| 新和様条幅 |      |
| 細 字   |      |
| 篆 刻   |      |
| 一 字 書 |      |